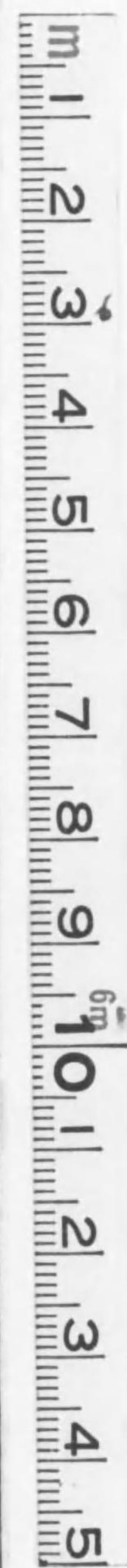




特251  
69

國幣大社  
高良神社  
由緒畧記



始





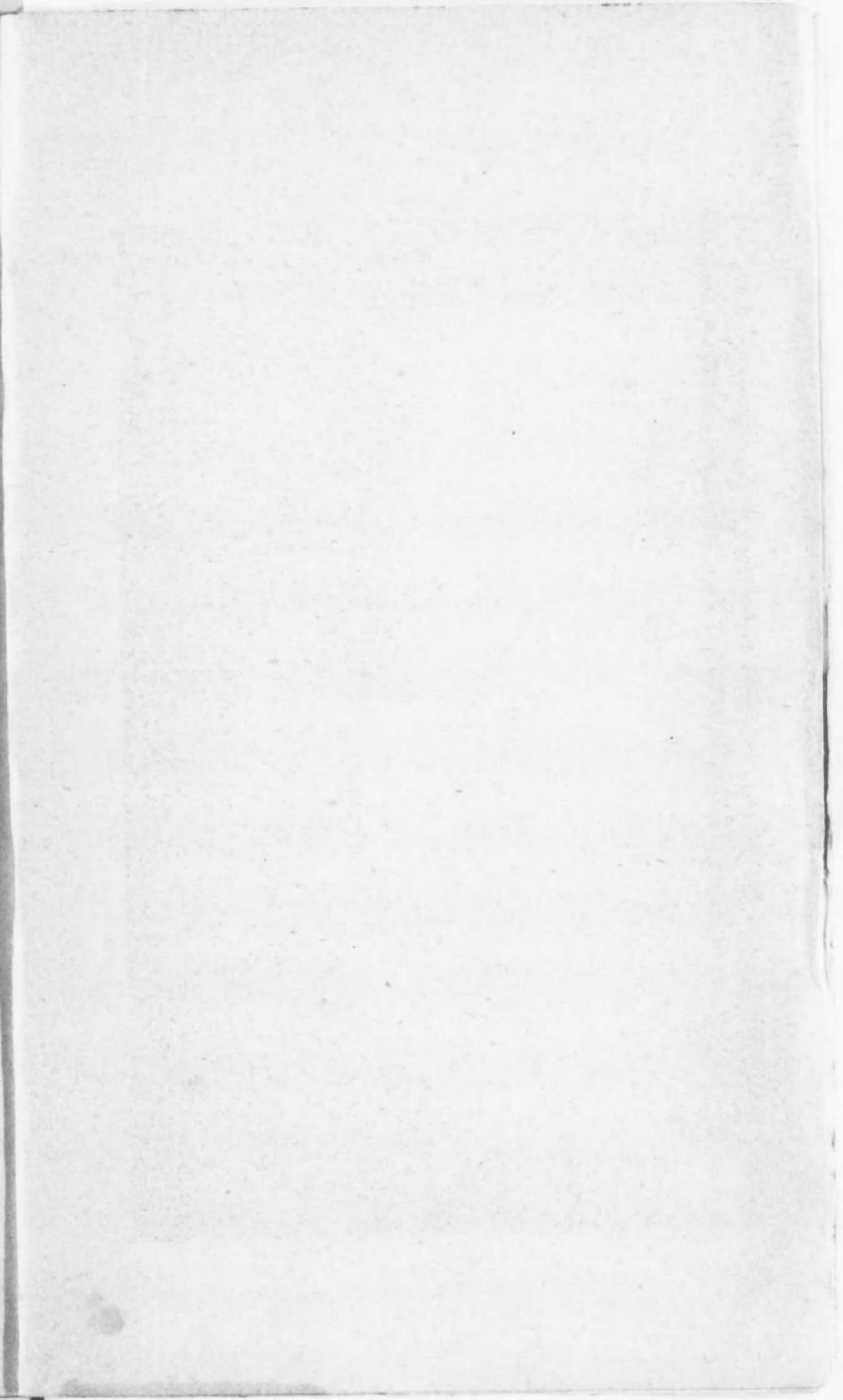
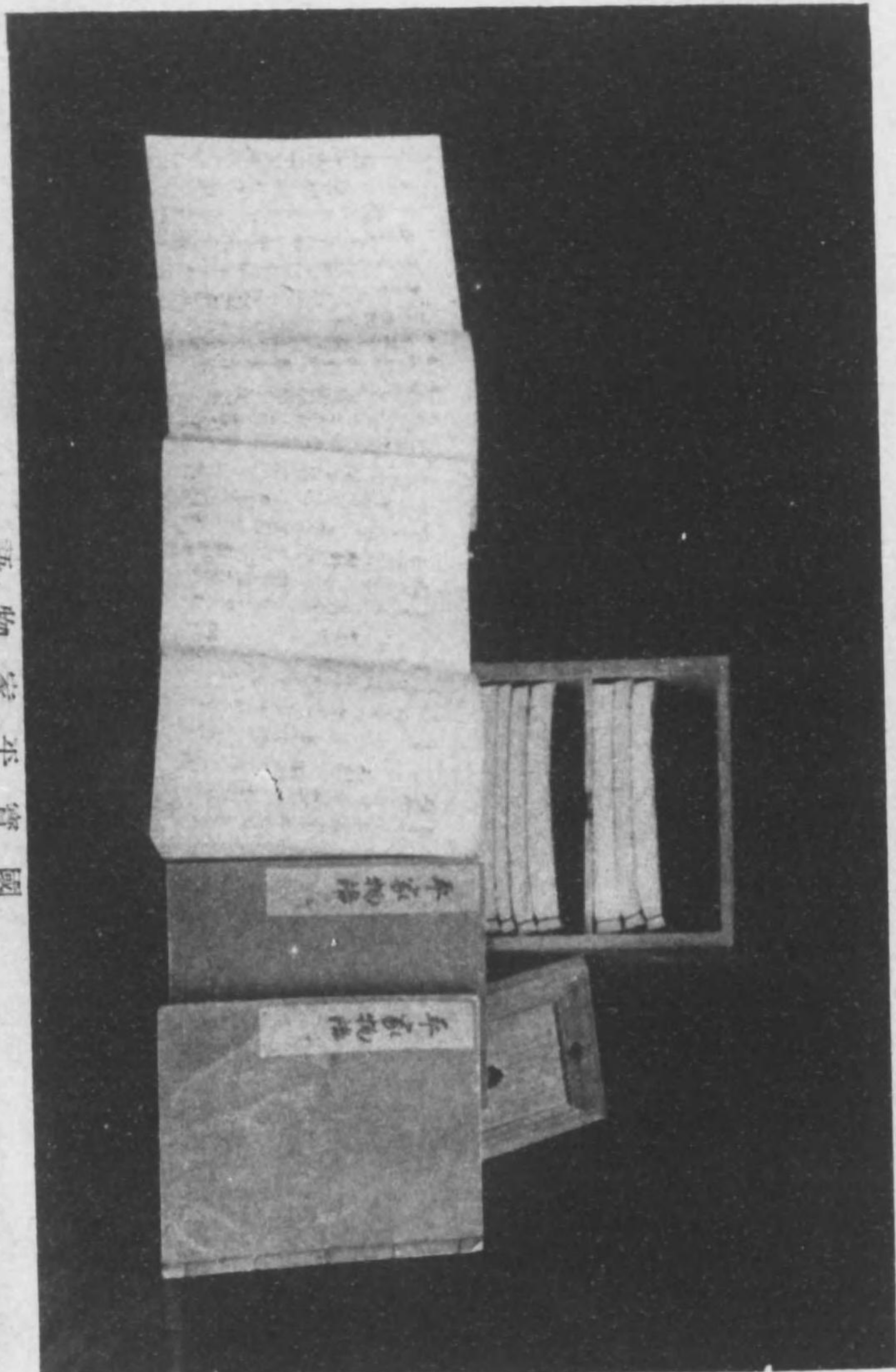
特 251  
69.



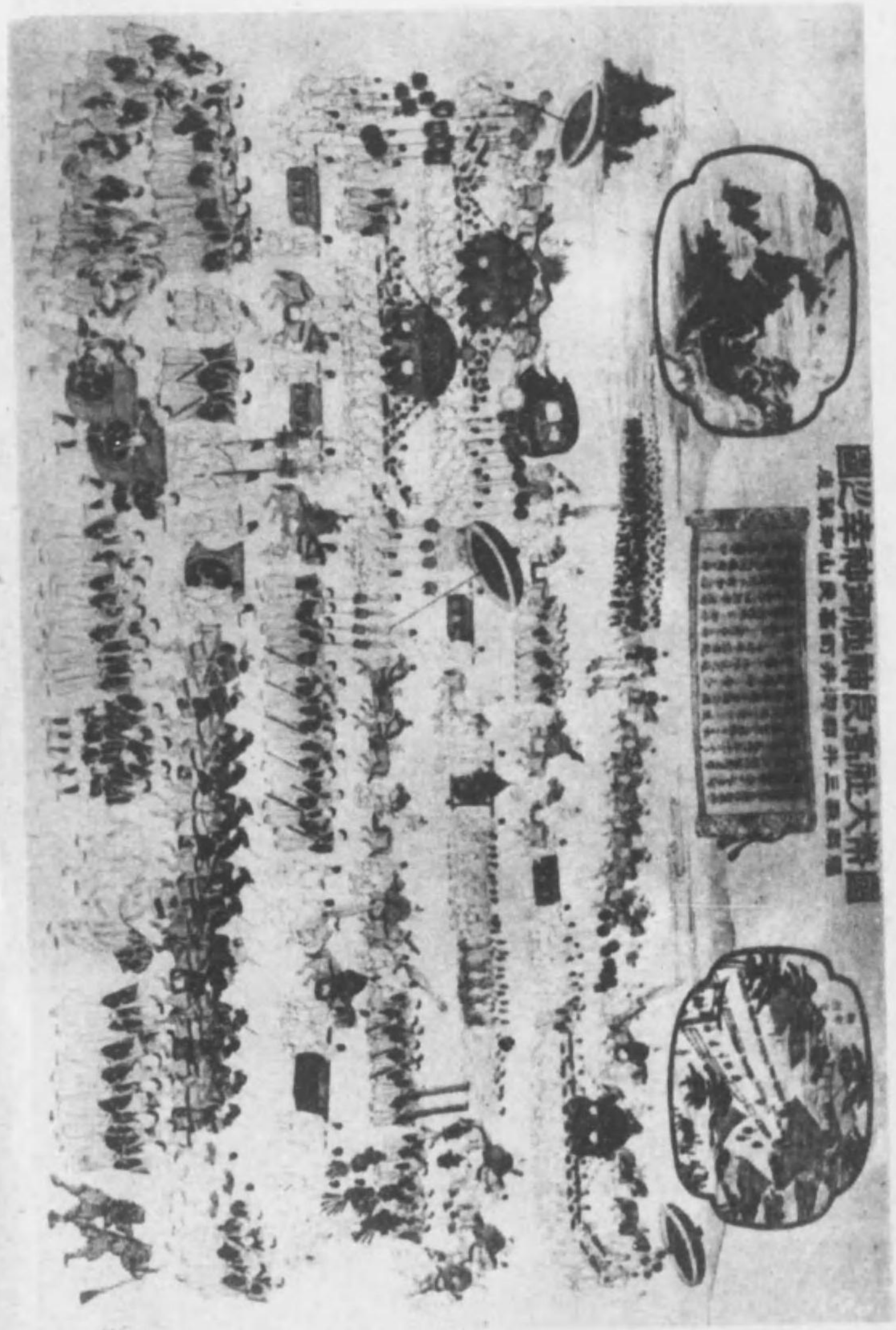
本社御社殿



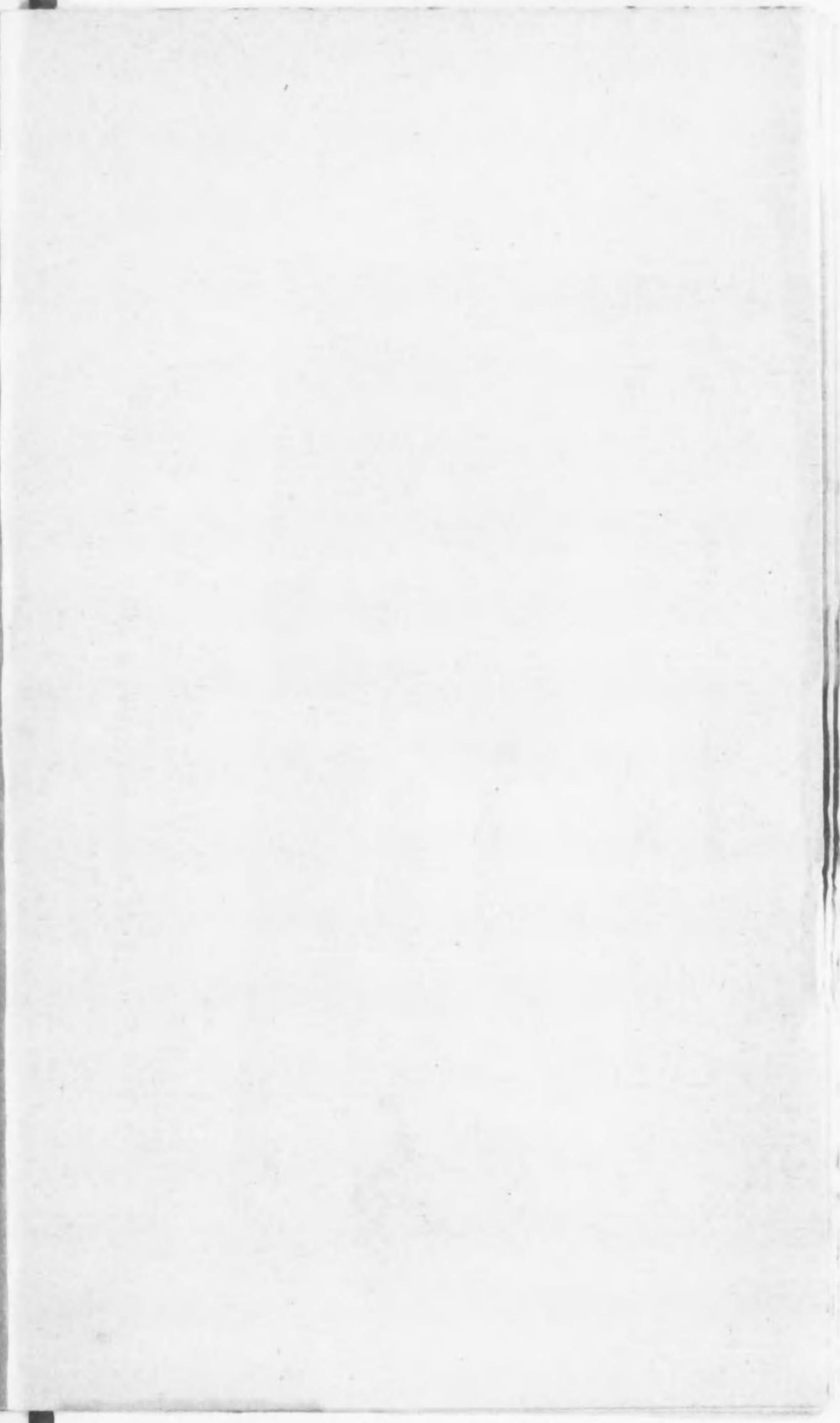
國寶平家物語







大州農產豐收圖  
農產豐收圖













られ、大正天皇御即位式の大正四年十一月十日に國幣大社に昇格あらせられ、特に金五百圓を下賜せられて居ます。

二

### 三、祭神

御主神	高良玉垂命
相殿	八幡大神
住吉大神	

### 四、御事歴

御創立以來朝廷の御尊崇厚く、延喜の制に名神大社に列せられ、桓武天皇延暦十四年五月從五位下を授け奉られてから逐次御昇叙、清和天皇の貞觀十一年三月從一位を奉授せられてゐます。古くは九州の總社と稱へられ筑後國一宮で、鎌倉時代以前までは御造營はすべて勅裁を以て行はれ奈良朝以來神佛

習合のため山内に寺坊數多建立されて居たのが維新の際神佛分離の爲寺坊は他に移されることになつた。如斯鄭重に取扱はれ九州に於ける武門武士の尊崇は申すまでもなく、一般の崇敬も特に厚かつた事は申すまでもありません。

### 五、時局と高良神社

稜威八紘に光被する高良神社は平時に於ても其御神徳を慕つて參拜する者四時絶ゆることがありませぬが特に戰爭事變等國家有事に當り愈々其御神威が發揚せられ武神としての御神徳が一層深く顯はれるのであります。

昔の事は暫く措き日清日露の兩役の際の事は記録や地方人士の思ひ出話によつて軍人並に一般民衆の熱願の狀況を偲べれますが去る滿洲上海の兩事變殊に此度の大東亞戰爭に際して陸海軍人の參拜數は實に莫大な數に達し朝霧深い老杉鬱蒼たる坂路を劍光帽影肅々として登攀し整然と社頭に額づく嚴肅莊嚴

三



の光景は忠烈義膽無敵皇軍でなくては見られぬことでその赤心に打たれては目頭の熱するのを禁じ得ないのであります

四

且亦入營に當り或は應召に際し大和男子の名譽を双肩に擔つて入隊せんとする勇士が家族親族を始め銃後の人々各種團體と共に日夜の別なく参拜する。

神社に於てもこの熱誠に感激し日夜精勵奉仕して居りますが又一方出征軍人並其遺家族に對しての慰問激勵等にも尠からず嚮心して居るのであります先づ今次事變が始まるや廣く應召された軍人家族に對し慰問の小品を贈り或は又戦地に在る將兵にと慰問袋の募集を企てこれに御守其他の品を入れて修祓を爲し師團の手を経て郷土部隊に贈る事十數回に及んで居るのであります。又戰場に於て名譽の負傷を受け或は圖らずも病に罹つて淋しく病院に靜養する軍人の身を思つては戦傷病兵慰問歌を募集し陸軍病院に寄贈して勞苦を慰めた次第であります。

斯く當高良神社は時局に際し一段と御神威の顯現せられて武運長久祈願の爲参拜する者逐次其數を加

へて常に雜踏して居るのであります。

## 六、神

## 領

文徳天皇齊衡二年五月位田四町を加へられ、天安元年十月封戸位田を充てられ、近古神封六萬餘石となつて居ましたが、豊臣秀吉の時僅かに百六十餘町となり改めて朱印千石を寄進しそれが定額となつて明治維新に至つたのであります。諸藩の版籍奉還と同時に神領は大抵上納せられ、現在では國庫から一社の經費を供進せらるゝ事となつてゐます。

## 七、神

## 事

一社神事は往昔は六十餘度でありましたが、現在に於ては大祭、中祭、小祭に別けられ、尙古例に依る祭事も數度あつて、昔ながらの多數の参詣者で全山人を以て埋むる有様であります。

五



恒例神事

- 一、歲旦祭
- 一、元始祭
- 一、玉替祭
- 一、春替祭
- 一、紀元節祭
- 一、新年祭
- 一、春季皇靈祭遙拜式
- 一、神武天皇祭遙拜式
- 一、講社大祭
- 一、神幸祭
- 一、天長節祭

六

中祭	中祭	中祭	中祭	大祭	中祭	中祭
一月一日	一月三日	一月十五日	自二月一日至三日	二月十七日	三月二十一日	四月三日
四月二十九日	四月十五日	四月十五日	四月十五日	四月十五日	四月十五日	四月二十九日

- 一、齋田播種祭
- 一、川渡祭
- 一、齋田植祭
- 一、大祓式
- 一、齋田豐穰祈願祭
- 一、秋季皇靈祭遙拜式
- 一、例祭
- 一、神嘗祭遙拜式
- 一、秋祭
- 一、齋田拔穗祭
- 一、明治節祭

中祭	大祭	中祭	中祭	中祭	中祭	中祭
五月上旬	六月一日	六月中旬	六月三十日	七月下旬	九月二十三日	十月十三日
十月十七日	自十月九日至十一日	十月下旬	十一月三日	十一月三日	十一月三日	十一月三日

七



- 一、入 營 奉 告 祭
- 一、新 嘗 祭
- 一、川 渡 祭
- 一、煤 拂 祭
- 一、大正天皇祭遙拜式
- 一、大 祓 式
- 一、除 夜 祭

大 祭

- 十一月 中旬
- 十一月二十三日
- 十二月 一日
- 十二月二十三日
- 十二月二十五日
- 十二月三十一日
- 十二月三十一日

八

八、本社特殊の祭事

(イ) 春 祭・玉替祭

二月一・二・三日古例に依る春祭、一月十五日に玉替祭  
 玉替祭は古く神功皇后三韓御征伐の御神託によつて授けられた満珠干珠の靈験によつてめでたく凱旋あ

らせられたるに因んだ祭事で、午後六時祭典執行後、社頭の燈火を消し神社職員が玉數個を持ち、雲集する参拜者の持つ替玉とカエマシヨノの掛聲も勇ましく交互に交換し、太鼓を合圖に點火、初めて各自持參の玉を検べて神社から出た玉か否かが分るので、神社よりの玉を授かつた者は當年の幸運を招くとて、遠近よりの参拜者参集し社頭は大賑ひを呈するのであります。

(ロ) 川 渡 祭

六月一日と十二月一日に行ふ祭事で、當年七歳と六十一歳の男女が何れも筑後川の流れにみそぎして赤禪を締めて参拜し、身體の壯健と長命を祈る祭で、當日は早旦より社頭は老若の別ちなく赤色の肌着や腰巻で賑ひ他に類例のない特殊の祭であります。

(ハ) 秋 祭 (俗稱おくにち)

十月九・十・十一日の三日間に亘る祭事で元は大祭でした。古くは九州九ヶ國の國司郡司が参集して



祭を行ひ、小貳・大友・菊池・島津の九州四族が四頭として輪番に神事を行うて居りました。現在でも年中を通じ最も参拜者の多いお祭で、當日筑後國內一圓何れの家庭も祭日としてお祝してゐます。昔から陰暦九月九日であつたが十月九日に變更太陽曆に改めたのであります。

一〇

### (二) 神幸祭

神幸祭は三年に一度朝妻頓宮に御神幸遊ばされる恒例で、近時久留米市日吉町頓宮並篠山神社へ神幸される例となつてゐます、古く稱徳天皇の神護景雲元年十月に、勅裁によつて行はれてから例となつて亂世の頃中絶した事もありますが再興して現在に及んでゐます。其の行列は甲冑を着けた騎馬武者や衣冠を正した神職が厳めしく神輿の前後を警衛供奉して蜿蜒數十町に亘り其の壯觀は九州稀有の大祭事であります。

### (ホ) 齋田神事

當社齋田は昭和大嘗祭記念として高良山下豊饒なる神田一反餘歩を齋田と定め、之が耕作は福岡縣三

井農學校自彊會之に當り、田植祭の田植舞は地元山川國民學校女子が奉仕し農學校生徒の練達した手振に合せて古式豊かに行はれる。五月に播種祭、六月に田植祭、十月下旬拔穂祭を奉行するので地方官公署よりの参列を始め、同校職員生徒並に地方民の参列多く、盛大なる齋田神事が執行されてゐます。

### (ヘ) 新穀献納式

拔穂祭後十一月下旬新穀献納式が行はれるので、當日學校内齋庫にて精選された向ふ一ヶ年間の祭典に神供する新穀を唐櫃に納め、新藁と共に奉耕者奉持、神職の先導、全校職員生徒供奉し表参道から参進し、社頭に於て莊嚴なる献納式が執行されるのです。

### (ト) 和歌献詠祭

當社には献詠會を組織して、毎月十五日献詠歌を神前に奉奠致します。春秋兩季には大會を開き會員全員参會祭典に参列する事になつてゐます。



(イ) 攝社 九、攝末社の祭事

社名	鎮座地	例祭日	其他祭日
高良御子神社	(社壇 境内)	十月十四日	月次祭 毎月十三日
豊比咩神社	(山内 清水)	十一月十三日	夏祭 八月二十三日 月次祭 毎月十三日

(ロ) 末社

稲荷神社初午祭  
二月初午の日の祭事で當日は粥占の神事があります。當年の穀物の吉凶を占ふ神事で農民の参拜特に多く筑後十社稲荷筆頭の神社を如實に物語つてゐます。

社名	鎮座地	例祭日	其他祭日
眞根子神社	(社壇 境内)	十月十四日	
印鑰神社	(右 同)	十月十四日	

愛宕神社 (山内愛宕山) 六月二十三日

稻荷神社 (山内稻荷山) 四月三日

御祖神 (山内神籠石) 十月十七日

天満神 (右 同) 右 同日

琴平神 (山内吉見嶽) 四月十日

嚴島神 (山内梅ヶ谷) 十一月十三日

鏡山神 (山内賀輪) 十月十四日

水分神 (山内奥ノ院) 十月十四日

味水御井神 (朝妻) 八月七日

鎮火祭 十二月一日  
月次祭 毎月四日  
初午祭 二月初午日  
講社祭 四月三日  
夏祭 九月六日  
冬籠祭 十二月八日  
月次祭 毎月六日

夏祭 九月十日

秋祭 十一月七日



(八) 桃青靈社献句祭

一四

桃青靈社は俳聖芭蕉翁を祀る全國唯一の神社でありまして寛政八年に初めてこの清水の淨地に奉祀されましたので當時俳壇の光彩陸離として四方に輝き知名の俳人が相踵で吟杖を曳き隆盛を極めました。爾來幾春秋を経て大正十一年に有志によつて慰靈と献句祭を復興し毎年十二月一日例祭日をトして弘く江湖の文人墨客より献句を勸募して莊嚴な祭典が行はれてゐます。

(三) 自得祠

攝社豊比咩神社南側の石祠にして文化元甲子歲九月自得師願主となり觀音堂(現豊比咩神社社殿にして徳川末期迄は觀音堂であつた)の守護神を奉齋した様であるが、後に自得師の功績を稱へて合せ祀つたもので現在は自得祠と奉稱して居る。

自得師は東國のある藩の武士であつたが、故あつて藩を出で高良山座主の下に身を寄せ、後に山内新清水に庵を結び觀音堂の堂守りとして隱棲生活に入つたが、荒廢した觀音堂の改修を發願し、日夕勤行の傍近郷近在を托鉢して改修資金を集め見事改修の工成り尙且維持費として自得師名義を以て畑地二反八畝十九歩を寄進し、觀音堂の維持を確

立したのであるが、星霜遷り、明治初年に豊比咩神社社殿となつて現在に及んで居る。

同師歿命の七月四日を祭日と定め毎年祭典が行はれて居る。

十、寶

物

神社寶物の中の一二を擧げると

- 一、平家物語 覺一本と稱へ國寶となつてゐます應安四年(凡五六〇年前)
- 一、齊衡文書 齊衡三年國司桑田真人以下連署本社祝物部大繼に附する書(凡一〇八〇年前)
- 一、天慶文書 天慶四年四月國司吉志宿禰以下連署筑後國神名帳(凡一〇〇〇年前)
- 一、國友太刀 第二代國友の作源賴朝より大友家に傳へ後當社に奉納せりと傳ふ
- 一、鏡 二面 いづれも漢鏡、漢魏及初唐時代のもの(凡一二〇〇年前)
- 一、船釘太刀 壽永年中豊後國紀新大夫行平の作宗阿波守平國勝の奉納(凡七五〇年前)
- 一、青江太刀 元徳三年備中國青江の住人右衛門尉平吉次の作(凡六一〇年前)



## 十一、史

蹟

(未指定)

一六

高良山附近には史蹟の存するものが可なり多くありまして景行天皇の十八年御駐蹕遊ばされたのを始め繼體天皇の二十年國造磐井が此の山によつて叛いた事もあり、北條氏の末世から豪族の兵を動かす毎に此の山に據り、吉野朝廷時代肥後の忠臣菊池氏が征西將軍懷良親王を奉じて此の山に陣せられたのは史上有名なもので、毘沙門嶽城、杉城などの城址があります。豊太閤陣營の地は吉見嶽(末社琴平神社境内)にあり、古來九州豪族の興廢は殆んど此の山に支配せられたといつても敢て過言ではありません。随つて神社に武運長久戰勝祈願の屢々行はれたのは事實で、今に國家有事の場合には勿論平常も賽者が非常に多いのであります。

## 十二、天然記念物

(未指定)

本社々頭を隔る二丁許り参道に副つた竹林中に數年前から孟宗金明竹發生學界に珍重がられてゐる金

明竹は金竹、ひよん竹なども稱せられ、大名竹、眞竹などは往々あれど孟宗のものは目下遠賀郡に一ヶ所と當所あるのみで甚貴重な資料である。親竹は昭和九年に生じ十一年に一本十三年十五年十六年十七年十八年と發生現在八本となつてゐる。

## 十三、神籠石

神社に参詣して誰も目につくのは神籠石であります。由來其の何物であるかはまだ明瞭でなく、山城の跡だとか磐境だとか學説定まらず、俗に鬼の窟屋だとか申します。此の謎の石は山の半腹から絶頂まで千四百餘間と云ふ長い間巨石が殆んど龜甲形に續いてゐます。昭和三年十一月御大禮儀の砌、大嘗會主基地方の風俗舞歌にこの神籠石を詠まれたのが左に擧ぐる歌です。

(主基地方風俗舞歌)

ちはやふる高良の山の神籠石

かけじくづれじ御代にならひて

一七



十四、名 所

高良山は廣漠とした筑後平野の中を蜿蜒として流る、筑後川（古名千歳川）に臨み、水繩山脈の西端に位置して四時眺望が良く、久留米市を俯瞰する位置に在る關係上名所が多いのですが、其の中から天和年中に第五十世高良山座主寂源僧正が十景を選んで其當時の公卿や風流人の詩歌を集めた事があります。今試に其の中から十景の題名を挙げて見ますと、

- 竹樓 春望 吉見 滿花 御手洗 螢 玉垂古松
- 朝妻 清泉 青天 秋月 中谷 紅葉
- 不濡山ぬれせぬ やましけれ 雲 鷲尾 素雪 高隆 晚鐘

以上の通りですが今は高隆寺と玉垂古松とはなくなつてゐますので唯往昔を想像するばかりです。然し末社稻荷神社から愛宕神社までの間の眺は昔には見られなかつた良い景色で春の花秋の紅葉に詩情ある人々が参集して來ます。

十五、境 内

當社境内は古は高良山全山二百三十七町餘であつたが明治初年に社壇僅かに四反餘を残し全部除地となりましたが、其後祭祀執行上竝風致上必要によつて、明治十年及大正四年國有林を境内に編入し、爲に境外末社境内が境内地に接續したので現在では境内總面積十一萬餘坪となつてゐます。

十六、神 田 其 他

- 一、田 二町七畝一步
- 一、畑 一町三反二十二步
- 一、宅 地 五百八十二坪
- 一、山 林 一町二反九畝二十六步

維新以前から篤志崇敬者の永代神饌燈油料として奉納に係る田畑山林等左の通りで有ります。



## 十七、講社

當社附屬の講社は、本社の古例による神幸祭に數千圓の祭典費を寄進するので、之を益々隆盛に執行し且つ永遠繼續の基礎を固むる主旨の下に明治十八年七月一日内務大臣の認可を得て設立したもので、爾來數度の規則改正等を行ひ現在では四千餘人の社員を有するに至りました。

## 十八、高良神社奉賛會

本社を初め山内には攝末社十餘社を數へ結構の壯大なもの數社に及び往時の隆榮偲ばるゝものがあります。就中本社の如きは規模の宏壯輪奐の美を極めたれども星霜已に二百七十年丹碧剝落し所々腐朽を來し殊に攝末社々殿の如きは腐朽甚しく之が修築補正は一日の偷安を許さないので先年來地方有志と協り本社を初め之等攝末社、社務所、齋館、神饌所、寶庫其他を修築補正する爲數十萬圓の事業計畫を協賛し聖域の保全御神徳の發揚を圖る目的を以て去る昭和十二年四月奉賛會を組織し一般から淨財を集め

以て所期の目的に向つて目下着々遂行しつゝあります。

## 十九、建造物

### (イ) 本殿幣殿拜殿神饌所

現在の本社本殿拜殿は萬治三年庚子十一月、末社愛宕神社本殿拜殿も相續いて舊久留米藩主有馬頼利公の建立寄進する處でありまして、本社屋根は其後數度葺替を爲し現在のものは昭和三年總葺替をいたしたものである。神饌所は昭和十二年十一月改築落成したものである。

### (ロ) 中門、透塀

本社中門及透塀は安永年間の造立有馬頼公の寄進であるが、透塀腐朽の爲昭和十二年六月改築したものである。

### (ハ) 一の鳥居

表參道一の鳥居は御井町にあり社頭より十五町を隔て、石造島木形で有馬忠頼公の寄進高さ二丈柱間一丈五尺承應四年三月の建設にして實に雄大優秀なものでこの地方に於ける代表的鳥居と稱へられてゐ



ます。

(二) 燈籠

一の鳥居の側にあり石造住吉形にして、高さ一丈八尺、寶曆十二年九月の建立其雄大なる事他に類例を見ないものであります。

二二

二十、参拜記念品

(イ) 長壽箸

御祭神の長壽の神としての信仰に因み、山杉で淨製した箸であります。

(ロ) 長命酒

古來長壽の神としての御神徳に肖る爲社頭に詣でし人々が御神酒を拜戴してゐますが此の御神酒を家に居る人又遠方に住む人々にも戴かれる様瓶入の風雅な長命酒があります。

(ハ) 繪葉書

高良神社参拜順路と交通機關

一、省線鹿兒島本線久留米驛下車

久留米驛前より乗合自動車あり

一、省線久大線御井驛下車裏参道によれば徒歩約二十分

一、福岡急行電車久留米驛下車

急行電車前より乗合自動車あり

一、三井電車東久留米下車乗合自動車あり

◎以上乗合自動車にて御井町行に乗れば一の鳥居まで行けます

御手洗橋を過ぐれば自動車道路開鑿完成によりこれによれば足弱の方でも樂に登拜が出来ます

二三



昭和十八年六月三十日印刷  
昭和十八年七月一日發行

(非賣品)

編輯者 國幣大社高良神社社務所

右代表者 國幣大社高良神社禰宜安元孝倫

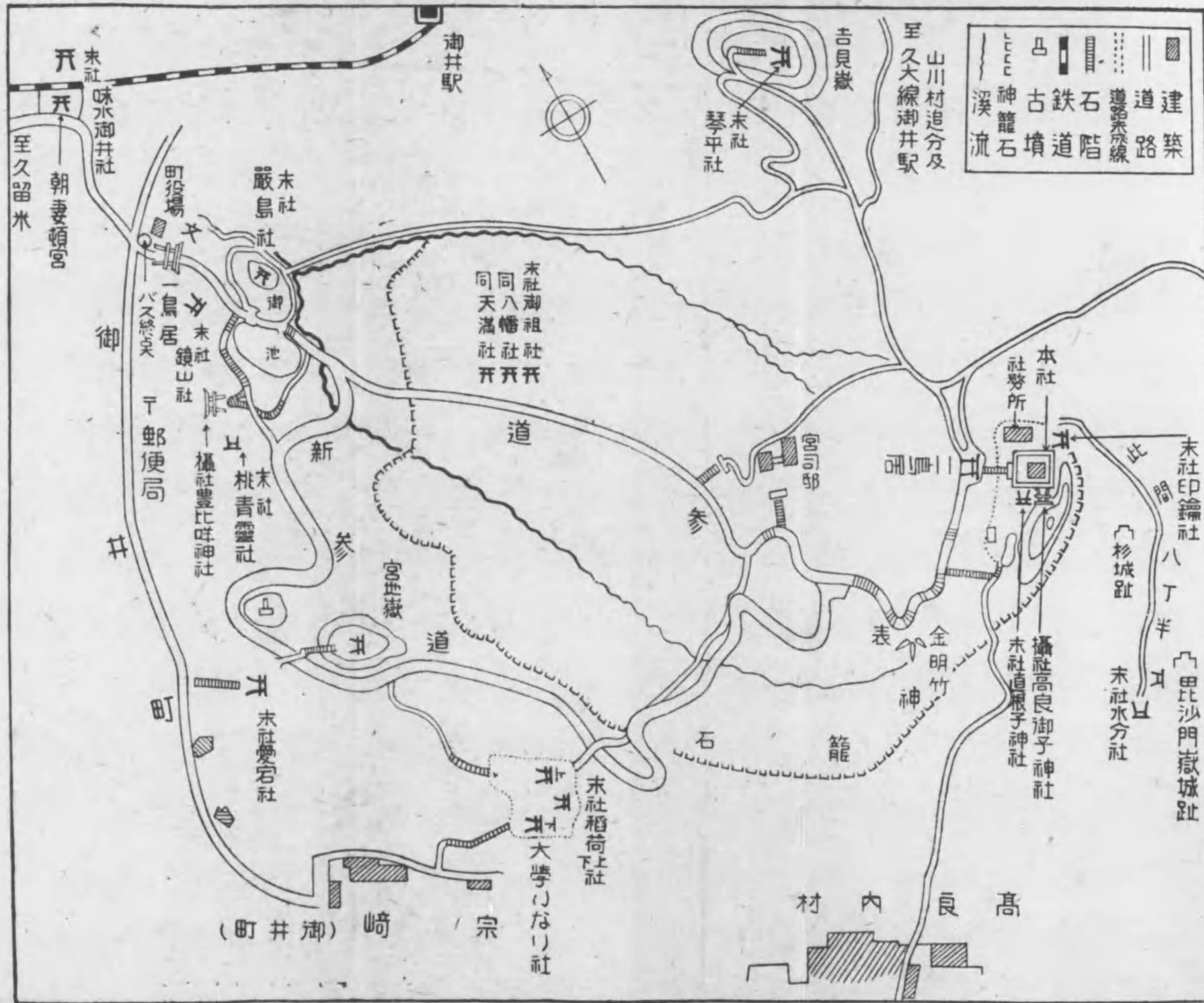
久留米市梅滿町一一〇〇番地

印刷所 田中印刷所

(印協會員南福五六一號)



# 高良神社及所管参拜路畧圖



編輯者 國幣大社高良神社社務所  
 右代表者 國幣大社高良神社彌宜安元孝倫  
 印刷所 田中印刷所  
 久留米市梅滿町一〇〇番地  
 (印協會員南福五六一號)



435  
278

1875  
1876  
1877  
1878  
1879  
1880  
1881  
1882  
1883  
1884  
1885  
1886  
1887  
1888  
1889  
1890  
1891  
1892  
1893  
1894  
1895  
1896  
1897  
1898  
1899  
1900



終



昭和二十一年春

初

権作

